

総合計画・総合戦略シンポジウム 議事録

開催日：平成28年2月8日（月）
時間：19:00～21:00
会場：恵庭市民会館 3F 中ホール

シンポジウム内容：人口減少に負けず、これからも住みやすいまちであるために
～ 今、私たちにできること～

モデレーター：北海道大学公共政策大学院 小磯 修二 特任教授

パネリスト：恵庭市長 原 田 裕
学校法人産業技術学園 事務局長 切 明 毅 氏
北海道文教大学人間科学部こども発達学科 講師 井 上 大 樹 氏
地域 FM e-niwa パーソナリティ 白 崎 亜紀子 氏
恵庭市総合計画審議会委員 青 野 菜 名 氏

来場者数：計100名

■ 開会

司会： 定刻となりました。皆様、本日はお忙しいところ、本シンポジウムにご出席いただき、ありがとうございます。

これより始めて参りますが、携帯電話をご使用の方は今一度、マナーモードになっていますかどうか確認をよろしくお願い致します。また、アラーム付きの腕時計など音が出るものをお持ちの方がいらっしゃいましたら、こちらの方も音が出ないように設定をお願い致します。

本日の司会進行を務めさせていただきます、パシフィックコンサルタンツの渡部と申します。本日の企画・運営補助を弊社で受託しております。どうぞよろしくお願い致します。

それでは、総合計画及び総合戦略シンポジウム「人口減少に負けず、これからも住みやすいまちであるために～ 今、私たちにできること～」を開始いたします。

本日のシンポジウムは、昨年度開催いたしました総合計画シンポジウムに引き続き開催するものです。

昨年度のシンポジウムでは、「あなたは10年後、どんな恵庭に住んでいたいですか？」を題目に、市民と行政が理解を深めることを目的として、北海道大学公共政策大学院小磯特任教授に「地方が輝くために」という内容のご講演をいただきました。

来年度から始まる、次期総合計画は、今後、10年間を見据えた、中長期計画であり、「花・水・緑 人がつながり 夢ふくらむまち えにわ」に向け、市として重点的に取組む予定の事業やプロジェクトを掲げています。市民と行政の役割分担を示しながら、あるべきまちの姿を考え、市民と行政のまちづくりの進行管理を行っていくものとして、重要なものとなります。

また、併行し、本年度は、国の「まち・ひと・しごと創生 長期ビジョン」の趣旨に則った、「恵庭市人口ビジョン及び総合戦略」が策定されました。

総合戦略は、総合計画の中でも特に重要視すべき施策であり、かつ、人口減少や少子高齢化が進む中で、高い持続性を確保するため、短・中期的に取り組むべき施策を掲げたものです。

本年度シンポジウムは、総合計画及び総合戦略の策定経緯を踏まえ、中長期ビジョンを皆様と共有していくと共に、今すぐ実施すべき取組みについての共通認識を図り、官民協働のまちづくりの実行に向けて開催するものでございます。

まず、「恵庭市総合計画及び総合戦略の策定状況」について、説明いたしました後に、北海道大学公共政策大学院小磯特任教授にモデレーターをお願いいたしまして、パネルディスカッションを行ってまいります。後程、ご紹介させていただきますが、パネリストには、原田市長のほか、総合計画及び総合戦略策定において、市と協働いただいた方々にご列席いただいております。

それでは、今回のシンポジウムの主催者であります、恵庭市を代表いたしまして、原田市長より、開催にあたっての挨拶を申し上げます。

原田市長： 皆さん、こんばんは。

今日は、総合計画および総合戦略を話し合うシンポジウムを開催いたしましたところ、時間が遅いにもかかわらず、このように、大勢の方々に来ていただき、誠にありがとうございます。

そしてまた、このシンポジウムには、小磯先生にお忙しい中、ご出席いただき、昨年度に引き続き、また、総合計画、総合戦略の策定においては、大変、お力添えをいただき、心から、感謝いたします。今夜もまた、どうぞ、よろしくお願いいたします。

本日のシンポジウムでは、パネリストには、総合計画および総合戦略づくりにお力をいただいた方々ばかりでございますので、そうした、策定過程の中での思いを、皆様にお伝えいただければと思っています。

総合計画については、すでに、基本構想について、議会にご理解いただき、議決いただきました。いよいよ、基本構想を含めた、平成28年度から10年間の、総合計画の基本計画がスタートするということでございます。

総合計画は、今までの計画づくりにはない、一昨年から、多くの市民の皆様のご協力をいただき、つくり上げてきたものです。例えば、中学生アンケート、シンポジウム、ワークショップでの組み立て、市民の広場でも多くの市民の方々にご議論いただき、それを骨子として、審議会で十分審議を重ねていただき、議会での特別委員会でも議論いただいた中で、今日を迎えた訳であります。

また、その途中には、国の地方創生の流れの中から、人口ビジョン、総合戦略をつくってきました。これもまた、委員の方々の意見をいただきながら、当面5年間の戦略的な計画をつくってきました。これもまた、実質的には、進んでいる話ですが、本格的には平成28年度からということで、総合計画、総合戦略が来年度から進み出すということになっています。

我々のまち、恵庭市は、道央圏にあって、人口減少社会においても、それほど人口減少が起きない、むしろ増えているという恵まれた地域です。

しかし、私たちが、さまざまな施策・事業を通して、努力を重ねなければ、このまちの豊かさは維持できないということが、これから、発生するということです。ですので、この、総合計画、総合戦略がきわめて重要なものとなっていますし、これを、しっかりと進行していかなければならないと考えています。

そのためにも、今回のシンポジウムが、十分に活かされるように願っているところです。

総合計画、総合戦略ともに、行政だけが行うものではない訳でして、市民の方々と、民間企業の方々、民間団体の方々、皆さまが一緒になって、「いいまちをつくらう！！」という意識を持って、情報共有しながらつくり上げていくものであると考えています。

そのためには、本日のシンポジウムは大変有意義なものとなると期待しています。

これからの恵庭市の将来・未来、子どもたち、私たちの子孫のために、「どういうまちをつかっていくか」ということについて、一緒に考えてまいりたいと思います。

本日ご参加いただいた方々に、心から感謝申し上げて、冒頭のご挨拶とさせていただきます。本日は、誠にありがとうございます。

司会：ありがとうございました。

■ 1 総合計画及び総合戦略の策定状況について

司会：それでは、本日のシンポジウムの本題に入ります。

まず、本シンポジウムの議題となります、「恵庭市総合計画及び総合戦略の策定状況」について恵庭市企画振興部 溝主査より、ご説明いたします。

企画振興部 溝主査：（「恵庭市総合計画及び総合戦略の策定状況について」説明）

司会：ありがとうございました。

■ 2 パネリスト紹介等

司会： 続きまして、今、説明させていただいた内容を踏まえ、パネルディスカッションに移ってまいります。

開始にあたりまして、モデレーター及びパネリストの方々をご紹介いたします。

まず、モデレーターをお願いいたしております、北海道大学公共政策大学院 小磯修二特任教授をご紹介いたします。詳しくは、お配りしたチラシの裏面をご覧いただければと存じますが、地域政策研究の分野において実践的な研究プロジェクトを数多く展開していらっしゃいます。また平成 24 年度には中小企業振興基本条例を考えるシンポジウム、そして、昨年度、冒頭ご案内させていただきました総合計画に係るシンポジウムにおきまして、講師を務めていただきました。

続いて、パネリストの方々をご紹介いたします。

まずは、恵庭市長 原田 裕。

続きまして、学校法人産業技術学園 事務局長 切明毅様。切明様は、総合戦略の策定に当たりまして、恵庭創生懇談会委員としてご尽力いただきました。

続きまして、北海道文教大学 人間科学部 こども発達学科 講師 井上大樹様です。井上様は、総合計画の策定に当たり恵庭市総合計画審議会委員として、そして恵庭創生懇談会委員として両委員にご尽力いただきました。

続きまして、地域 FM e-niwa パーソナリティ 白崎 亜紀子様。白崎様は、総合計画の策定に当たりまして、恵庭市総合計画審議会委員としてご尽力いただきました。

続きまして、恵庭市総合計画審議会委員 青野 菜名様。恵庭市社会教育委員としてもご協力いただいております。

■ 3 パネルディスカッション

司会： それでは、パネルディスカッションに移ってまいります。

これからの進行は、モデレーターとして、小磯教授をお願いさせていただいております。小磯先生、よろしくお願いいたします。

小磯教授： はい、皆さん、こんばんは

これからのパネルディスカッションにおいて、司会・進行役＝モデレーターを務めます、小磯でございます。よろしくお願いいたします。

先程、司会の方からご紹介いただきましたが、この恵庭とは、最近、大変関わりが深くて、最初は、中小企業振興条例を恵庭で制定されるということで、私が、地方の立場から地域経済に関する研究をしているということで、お話をさせていただいたということがきっかけです。

その後、総合計画の市民向けシンポジウムで、話をしてほしいということで、お手伝いをいたしました。

私は、元々、霞ヶ関で役人をしておりまして。役人といいましても、国土計画

や地域開発計画といったプランニング、つまり、長期の国・地域がどのような方向を目指しながら、どのような施策をやっていたらよいかということを長くやっていました。そのため、恵庭市が新しい総合計画を策定されるのであれば、お手伝いさせていただければということになりました。

それから、お付き合いが深くなり、それで、本日のテーマである、「地方創生」という国から示された政策の中で、地方が総合戦略をどのように構築していくべきか、人口ビジョンを描いていくべきか、ということでの、恵庭で創設された懇談会に、切明さん、井上さんと一緒に参加させていただいて、総合戦略策定に当たったという関わりがあります。

その中で、本日、恵庭市での、総合計画と総合戦略を考えるシンポジウムにおいて、改めて、恵庭との経験を少し活かしながら、お手伝いできればということで、参った訳でございます。

最初に申し上げたいのは、私は、様々な地域の総合計画に携わってきました。私の関心は、「地方」という、大都市から距離がある、ハンディのある地域がどのように生き抜いていくのか、ということでもあります。そのための、国からの政策のあり方、それに対して、地域がどのように活動していけばよいのか、という両面の政策に興味がありまして、かつ、できれば、それに実践的に関わっていきたいという思いがありまして、フィールドは主に北海道なのですが、海外の途上国などの地域の計画などにも数多く関わってきております。

その中で、今の日本の状況を見ると、昨年出てきた「地方創生」という流れに、地域がどう向き合っていけばよいのか、それは大変難しい命題でして、不安と期待が交錯している状況だと思います。

その中で、これまでのまちづくり、総合計画と切り離して、国から示された「地方創生」にどう向き合うかという中で、総合戦略・人口ビジョンづくりという流れにあります。特に、地方圏に行くと、人もいないような自治体が、それに向き合うということは、本当に過酷な状況の中で、今の日本の地方創生政策に向き合っているということになります。

恵庭市は、これまで地道につくってきた総合計画の取組みと、国から示された総合戦略の取組み、その両方に、きちんと向き合って、どのような方向で議論していけばよいのか、向き合っていけばよいのか、どういう形で市民が活動していけばよいのかについて、きちんと語る場を持った。こういった向き合い方、メッセージ性のある取組み方は、私の知る限りで、他地域ではないと思っています。

そのような思いの中で、本日は、「コーディネーター」ではなく、「モデレーター」という言葉を使っています。それは、できれば本日、総合計画、総合戦略の中身を、会場の皆さんと一緒に、一步でも、より深めていくことが、総合計画、総合戦略に関わったパネリストの皆さまと議論していく「引き出し役」として、

より深い議論を引き出していくのが、私の役目だと思っています。

では、私なりの恵庭市総合計画の印象についてお話しますと、先ほど申しましたように、総合計画の市民シンポジウムでお話させていただきましたが、その時、改めて、恵庭市の総合計画づくりを拝見し、お話を聞きましたが、一言で言うと、他地域に比べて、「大変丁寧に計画づくりをされているな」という印象があります。私の関わった、ある地域の計画では、住民の皆さまが参加される場面というのは、ある意味、形づくりであり、「市民も関わってつくった」という行政側のひとつの手段として、設けられていることが多いのですが、恵庭市の場合は、大変丁寧に積み上げてこられている。

いろいろな総合計画に関わってまいりましたが、総合計画の評価というのは、計画書を見ただけでは絶対に分かりません。それが、どのようなプロセスでつくられてきたかという、その過程も含めて評価されるべきだと思います。特に、「すごい計画だな」と思うものは、各地域の、非常に多くの方々が、「この計画づくりには、私も関わった」「この計画づくりのこういうところに私も参加した」と言えるような計画です。つまり、より多くの人たちが、総合計画に、自分なりの共有感を持って、親しみを持った計画となるものが、すばらしい計画だと思います。決して、計画の中にどのような文言が盛り込まれているかということではないと思います。

確かに、総合計画ですから、いろいろな施策を体系的に盛り込まなくてはならないので、何にも関わっていない方が、パッと計画書を見ると、総花的に見えてしまうかもしれません。でも、この場にいらっしゃる方でも、あるワークショップで自分が発言したことが、こういうところに表現されているということを見ると、自分もつくった計画だということになる。総合計画というものは、そういう形で見ていくことに意義があるのではないのでしょうか。

では、次にお話したいのが、「地方創生」という国の政策の流れに対し、「総合戦略」という形で地域が取りまとめていくということについてです。

昨年、「地方創生」という大きなうねりが日本を襲いました。日本創生会議という機関からのレポートで、日本の地方、特に北海道は8割程度が消滅の可能性があると発表されました。これは、地方にとっては、大変ショッキングなメッセージです。ただし、これは決して、日本創生会議が、人々を煽るために出した提言ではありません。

ここには、大変深い意味があって、それまで、人口減少というのは、30～40年前から警鐘が鳴らされていたのに対し、誰も真剣にそれに向き合う状況ではなかった。その中で、昨年の5月に出された日本創生会議の提言には大きな意味があります。

日本というのは、東京を中心とする大都市圏に多くの若者がどんどん流れ込んでいくという、集中的な構造があり、その中で、子供を産む若い女性が大都市圏

に集約する。非常に出生率が低い東京が若い女性を集めることによって、出生率の負のスパイラルが起きている。このような状況を放っておくと、日本は大変な状況になる。そのメッセージとして、日本創生会議というものには大変意味があると思います。

出生率の問題だけでなく、あまりにも多くの機能が東京に集中しているという、日本の国の構造に対し、今後、我々はどのように向き合っていくのか。いわゆる「人口の社会増」に向け、札幌、恵庭、それぞれの地域がどのような立ち位置になるのか、そこから、地域の戦略を考えていくという、非常に前向きなメッセージとして、「地方創生」という動きに、地域が向き合っていく必要がある。

その中で、恵庭の総合戦略というのは、それまで地道に丁寧に積み上げてこられた総合計画の中で、そのうちの一部であり、改めて「人口減少の時代に恵庭はどう立ち向かっていけばよいのか」に議論を重点化して、それを集約的にまとめたという総合戦略を立てられた。また、それを掲げる背景として、人口ビジョンという作業を位置付けられた。

これは、私は、他地域のいろいろな取組みの中でも、ひとつの「恵庭スタイル」という、非常に分かりやすい、ピンポイントの議論を進めてこられたのではないかと感じております。

とはいっても、これだけの短時間で策定された総合戦略には、まだまだ隠された課題もありますし、今後、長期の総合計画と、5年の総合戦略の中で出された施策については、計画が出来たからこれで終わりということではなく、さらに議論を深めていく必要があるのではないかと考えております。

そういう意味では、本日は、いろいろ議論を進めていく、最初のものであり、きっかけなのではないか、そのような思いで、本日はモデレーターとしての役割を担わせていただきます。よろしくお願いいたします。

ディスカッション① 策定にあたっての感想・意見・重要と思うこと

小磯教授 : では、これからの進め方ですが、パネリストの皆さんに、最初は、これまで、総合計画、総合戦略づくりに関与されて、どういう分野に関心を持たれ、どういう施策が大事だと思ったか、また、どのような政策議論が印象深かったかといったところを、それぞれのお立場で率直なところをお聞かせいただければと思います。

よろしくお願いいたします。

最初の順番は、切明さん、よろしくお願いいたします。

切明 様 : よろしくお願ひいたします。

手元の広報恵庭の2月号に、懇談会に出たことからインタビューを受け、記事にいただきました。ありがとうございます。

学校としまして、恵庭市、そして多くの市民の方々に支えられて、北海道ハイテクノロジー専門学校、北海道メディカル・スポーツ専門学校、北海道エ

コ・動物自然専門学校の3校の運営をさせていただいています。

恵庭市の課題としている人口減少は、我々、学校運営をしている中では、同じく、学校も、18歳人口がどう増減していくのかということが、非常に関わってきます。決して、私どもも、今後18歳の人口が上昇するとは思っていません。恵庭市と同様に、人口減少にどう向き合っていくのかということが、今回、恵庭創生懇談会に出まして、共通の課題だなと気づきました。気づかせていただき感謝しております。

では、その人口減少にどう向き合っていくかということですが、先ほど、恵庭市より総合戦略についての概略説明がありましたが、会議に参加して思ったことは、恵庭市が、新しい価値の創造をしていく努力をしているのだなと感じました。総合戦略の中で、今ある恵庭市の強みを、恵庭市民の方々が、しっかりと見出して、その強みを新たな価値につなげていくということをされていると感じました。

今あるものをしっかりと、恵庭市の価値として創造していくことと、今あるものをどのように組み合わせて、新しい価値を創造していくかという点であったり、組合せによって、今ないものが、新たに価値を創造していけるのではないかという印象を受けています。恵庭の価値を創造していくことで、人口減少という課題に対して、しっかりと取り組んでいけるのではないかなと感じました。

私の立場では、恵庭市の課題の中にも挙げられていますが、若者の地元就職率が低く、若者の流出が続き、定住しないという課題については、学校としてもしっかりと取り組んでいかななくてはならない課題だなと感じております。

今、私どもが運営している3校の在校生は約1,700人おり、毎年、750名くらいが3月に卒業していきますが、正直なところ、今までは、その卒業生に対して、恵庭での就職に限った就職支援としてはあまり意識してこなかったというのは事実でございます。今後、恵庭市の抱える課題＝地元への就職率をどう高めていくかということを、私ども学校として、学校の課題でもあると思いますので、真摯に取り組んでいけたらなと思っています。

懇談会で思ったのは、その共通課題に対し、恵庭市、市民の方々、私ども学校が、新しい価値を作っていくためにどうしたらよいと思った会議でした。

小磯教授：はい、ありがとうございました。
ところで、切明さんにとって、恵庭の価値とはどういった部分だと思われますか？

切明様：ひとつ、学校を運営しているということもありますが、市の中に、高等教育機関が、学校法人としては、3法人ある市なのですね。先日、北海道の別の地域の説明会に行ってきたのですが、そこはやはり、人口減少が激しく、恵庭よ

りも激しい地域だったのですが、若者が来る環境というは、高等教育機関がないといけないなと感じました。

恵庭市は、花・水・緑のまちという素晴らしい価値があります。これから、学校がある恵庭市が、本学園で1,700人くらいと、他法人を加えると4,000人を超える、18歳から20歳前半の若者が確実に来るという強みがありますので、それをさらに強みにしていきたいと思いましたし、強みと考えていただければと思いました。その若者が、2～4年間学習し、専門知識を身に着けていく過程で、そのことが恵庭市に利益を生んでいくようになれば、恵庭にとって、新たな価値の創造につながっていくのではないかと感じました。

小磯教授： はい、ありがとうございます。

そこについては、私もまったく同感で、地域が、18歳から20歳前半の若者を多く抱える高等教育の場を持っているというのはすばらしい価値で、それをどのように活かしていくのかということが重要です。今のお話ですと、切明さんの学園で1,700人、全部で3,000人近くの学生が来る。これはやはり、恵庭の強みではないかなと思います。

どうもありがとうございました。

では、同じく、北海道文教大学ということで、高等教育で活動されていらっしゃいます、井上さん、よろしくお願いいたします。

井上 様： はい。私は、北海道文教大学の教員ということで、4年前からお世話になっています。実は、恵庭住民歴も4年ということで、新参者なのですが、今回の2つの委員のほかに、早くから、社会福祉審議会の児童福祉部会員というのもさせていただいております。

専門が教育学・保育学でして、若者の自立の問題を社会の枠組みで考えていくことに興味・関心があり研究をしているものですから、そちらの方に関心が向きます。

総合計画の場合は、それまでのまちづくりをどのように総括し、発展させていくかという視点ですので、教育福祉の視点が存分に盛り込まれていくということと、恵庭の場合は、私は外から来たということもあるので、社会教育、生涯学習が非常に盛んなまちであることが、私にとっては非常に魅力的でした。

学校をつくる上でも、フリースクールをはじめ、通学合宿など、学校を支えていくような、たくさんの住民の方々がいらっしゃる。ということは、子どもを見守っている住民がたくさんいらっしゃるということが、札幌など都市部にはないことで、そういうところに興味を持って、住みながら働きたいなと感じまして、今に至っている訳です。

ただ、私事ですが、大学の教員をやっていると、9時～17時どころか、大体22時くらいにやっと仕事が終わって家に帰るという生活が続いているということもあって、私自身が、一市民として、まちを歩くということが正直あまりで

きなかったなと思ひまして、これは、専門家として反省しています。

実は、総合計画や総合戦略に関わる中で、その委員さんや、北海道文教大学では、学生は地域に育てられていると言い切れるくらいに、ボランティアの機会をいただいているので、そういった中で、皆さんにお世話になっている学生たちに、恵庭市のまちの実態を、子どもたちのことを中心に教えてもらいました。

特に、恵庭創生懇談会委員を受けるときに、非常に気になっていたのは、地方の生き残りというのは確かに大事なのですが、その時に、本当にみんなが暮らし続けられるという視点、まさに教育福祉の視点が抜け落ちてしまわないかという危惧がありました。

というのも、私の同業者でも、様々な地域の総合計画、総合戦略に関わっている方が多いのですが、話を聞いていると、どうしても、まずは、経済活性化という話になってしまいがちだと感じております。「まちにお金がない」「どこを削って、どこに充てるか」という議論になりがちです。確かに、そういう段階になっているとは思いますが、その議論だけでは、私の興味、関心の部分でもあるのですが、例えば、経済的に苦しい家庭でも、子どもをしっかりと育てていけるかなど、そういった視点も含めた計画でなくてはいけないと思っています。

その時に、実は、人口をどうするかという議論を、どのまちでも正面に向き合ってやらなければならないということが、多くのまちにとってはいい契機になったのではないかなと感じております。

その中で、恵庭も、今まで、社会教育や子どもたちを大事にしてきたということで、多くの委員やアンケート、シンポジウムなどでの市民の意見を伺ってきた中でも、「弱者をつくらない」などといったことが多分に含まれていた議論がある中で、私自身もそれを具体化することが重要だと思いました。

つまり、日本の中での資源が限られてくる中で、人やモノやお金を奪い合うという構造がどうしてもできてしまうのだけれども、恵庭の場合は、一連の、まちの生き残りを懸けた構造の中でも、どう分け合っていくのかというような視点での議論ができていたのではないかと思います。

そういったことを、私自身も、多くの市民の方々の議論の中で、学ばせていただきました。

小磯教授 : はい、ありがとうございました。

私と同業で、忙しくて、市民生活の時間が持てないということで、身に染みております。ありがとうございました。

それでは次に、白崎さん、よろしくお願いいたします。

白崎 様 : はい、FM e-niwa の白崎でございます。

審議会に参加したときに、女性の審議会委員が意外と多いのだなと感じまし

た。その中で、皆さん意見を活発に交わしましたが、実際に、子育ての現場に
いるお母さんたちにとって、「総合計画」「総合戦略」といった言葉は、どうし
ても、議論を尽くしても、なんだか遠いものだなというのは感じました。

関係者の方もいらっしゃると思いますが、週末に、シーニックナイトが始ま
って、私も見てきました。道の駅の会場や、他の会場も回ってみました。実行
委員の方に番組に出てもらって、お話を伺って、なるほどなと思ったのは、市
内のいろんな場所にアイスクャンドル、スノーキャンドルを置いて、きれいだ
なと思うことももちろん大事なのですが、自発的に皆さんがやり始めていると
いうことがすごく大事だなと思いました。

「参加してくださいね」という呼びかけはもちろんするのですが、「なんか楽
しそうだから自分でもやろうか」という形で参加する人が増えているというこ
とと、子どもも、年配の方もみんな作れるという、あらゆる年齢層が楽しめる
ということと、学校単位や町内会単位など、いろいろなコミュニティの単位で
参加できるということ、あとは、ローコストだということも、なるほどなと思
いました。家からシャベルとバケツ、ロウソクだけあれば作れるということだ
すね。

自分たちが楽しんでやった結果、会話が生まれたり、それを見ようと思う人
がまちの中で動いたり、市外から来たりする。これはすごいことなのではない
かなと思いました。人を動かすというのは、なかなか難しく、大きな建物をつ
くるなどとなれば人は動きますが、これだけローコストで、損得関係なく、
これだけ楽しめるということですね。

こういうのをやっていけば、おそらく会話が增えるとか、知り合いが増える
とかにつながって、ゆくゆくは防災にもつながっていくことなのではないかな
と考えました。

お母さんたちにとっては、総合計画というのは難しいのですが、もしかする
と、このシーニックナイトのような活動は、総合計画がオールインワンで入っ
ていることなのではないかなと感じました。

「こういうことなんだ」という形で、恵庭が今、何かしようとしているらし
いということを、子育ての現場の人たちに伝えていかなくてはいけないなと感
じました。

小磯教授 : はい、ありがとうございます。すばらしいお話でしたね。

恵庭市のシンポジウムですけれども、恵庭市という地方自治体、地方自治体
の最大の政策目標というのは、地方自治法に書いてありまして、このように示
されています。「地方自治体の役割は、最小のコストで、最大の成果を上げ
る」。これがちゃんと地方自治法に書いてあるのです。これを言い換えると、
「ローコストで、人を動かす」という、まさに今、白崎さんがおっしゃった、
シーニックナイトのような、恵庭という地域の魅力につながっている活動のこ
とだと思います。

ここに、総合計画、総合戦略の理念と実践が、縮図のようにあるなど感じながらお話を伺いました。

それでは、お待たせいたしました、青野さん、よろしくお願いいたします。

青野 様 : はい、策定に当たっての感想なのですが、まず、私は、中学校1年生の娘が1人おりまして、普通のお母さんをやっています。町内会では、育成部長をやっておりまして、町内会のお母さんたちと関わる機会が、他の方よりは多いかなと思っています。

その中で、「総合計画の審議会委員になってください」というお話をいただいた時に、正直、「総合計画って何だろう？」というのが、最初の意見でした。これは、私一人だけなのかなと思って、ママ友、同学年のお母さん方に、「総合計画の審議会委員というものの話が来たのだけれども、総合計画って知っていますか？」と伺っても、誰も知らなかったのですね。

行政でいろいろな計画を作っているけれども、子育てに一生懸命なお母さんは、もしかしたら、「総合計画」という言葉を知らないというよりは、関心を持ってない。情報発信はいろいろしているのだけれども、どれが総合計画の話なのかが分からないというのが正直なところなのかなと思いました。

何も分からないまま、いろいろな会議に参加しているうちに分かったことは、行政は、本当に細かいところまで、市民のことを考えていろいろな計画を作っているのだなということが分かったのですね。

確かに、夜遅くまで電気がついていてから、残業されて一生懸命されているのは、感じていたのですが、びっくりしました。無関心な自分にびっくりしたのと、今までそういう情報が出ていたのに、私は全然関心を持てなかったのだなと反省しました。

そこから、広報など、隅々まで見るようになりましたが、他のお母さん方に聞くと、広報を隅々まで読んでいるという方はやはり少なく、後ろの図書館のことや行事のことが書いてある「お知らせコーナー」だけ読んでいます。なかなか、前のほうの「予算がどうですよ」「議会がこうですよ」という難しいところまで皆さん見ないのだなと実感しました。私もそうだったのですが。

ただ、それでは、自分たちも、いろいろな子育てサークルや手当などをいただく上で市役所に行く機会が多いのですが、無関心なままではダメなのだなと思って、総合計画の会議に出終わった後に、お茶をする機会があったりすると、「今、こういうことを恵庭市は話をしているよ」という話をするようになりました。「難しそうだね」「大変なのによく出ているね」とは言われるのですが、口コミで情報発信するというのは大切なのだと感じました。「恵庭市ってそんなことやっているの？知らなかったよ」って言ってもらったりもして。

広報などでお知らせをすると、どうしても難しいことと皆さん思ってしまうので、本当に分かりやすく書いてあって、「なんだ、そういうことか」ということ

	でも、活字、広報というものを通すと、「難しい」と構えてしまって、なかなか柔らかに伝わらないということがあります。 それではもったいないなと思いました。せっかく、いろいろな方々が、会議に出てきて、いろいろな意見を言っているにも関わらず、また、それが、自分たちに返ってくるはずの計画なのに、それを受け取れないということはもったいないと思って、自分のできることとして、周りの方々にアナウンスさせていただきました。 重要だと思うのは、我々、母親世代も、十分に、行政が何をしているか、何をしていきたいのだろうということに、関心を持つことがとても大切なのではないかと感じました。
小磯教授	： はい、ありがとうございます。 苦勞してお仕事されている行政の方にとっては、大変、涙の出るような話だったのではないかなと思います。 すごいですね、お友達とお茶しているときに総合計画の話題が出るとは、恵庭市民のレベルの高さを改めて感じさせられました。 でも、青野さんにお聞きしたい。 それまで行政との間に距離があったというのは、いろいろおっしゃられましたが、例えば、行政の出している資料とか、「やはりこれは分かりづらい」とか、「これはなかなか市民に伝わらない」とか、そういうのはありますか？
青野様	： 学校のプリントもそうだと思いますが、活字ばかり、挿絵もあまりかわいくない。白黒。 町内会でもそうなのですが、自分の町内でもそうでした。行事のお知らせも全部活字でした。絵もない。そこで、私が育成部長になってから、全部カラーにして、写真や絵を全部入れたのですね。すると、参加率が全然違ってくるのですよ。目に見えてどういうことをするかということが分かる。活字だけだと、どんなことするのか、どんな子が来るのか、ということが一応書いてあるのだけれども、行くまでにハードルが高いということがあります。何をするか活字では分かりにくいので、見えるように情報発信することが大事なのだなと感じました。 なので、いろいろな計画の時にも、カタカナの横文字で書いてあると分かりにくいので、そういうのには、注釈を振ってほしいなどのお願いをしています。そういうのは、どんな市民にも分かりやすく書いていただきたいなどといった意見をしています。あとは、かわいくしていただければ、ちょっと見やすいかなと思います。難しいと思いますが。
小磯教授	： 貴重なご意見を、ありがとうございました。 さて、まず一巡、総合計画と総合戦略の策定にかかわった皆さんからお話しいただきましたが、市長いかがでしょう、感想でもいただければ。

原田市長　：　パネリストの皆さんから、いろいろなお話をいただいて、非常に参考になりました。

切明さんからのお話で、これだけの若者が学校に通っているあるいは住んでいるという強みをどうするのかという話でしたが、本当に考えなくてはいけないと感じました。恵庭では、若い方が遊ぶところもありありませんし、もちろんススキノもありませんし、札幌の駅周辺の賑わいもあります。ないのですが、でもやはり、札幌にはないけど恵庭にある。おいしい店、かわいい服、そのようなことがあって、休日の1日を恵庭で過ごしてもらおうということがあればなということを考えました。恵庭マルシェなどもやっていますので、そういったところに顔を出してもらえるようになればと思います。

それから、井上さんからもお話がありました、総合計画や総合戦略の中で、「教育」「福祉」「弱者」、そういう議論もあったというのは、非常にありがたいことだと思っています。私は、人口減少に負けない、人が減らないということになると、どちらかというと、仕事をつくるとか、あるいは、看護だとか、高齢人口を増やすだとか、そればかりに目は向きます。ですが、学校で言えば、土曜授業をしていることで、子どもは生き生きとして学校に来て、授業を受ける、成績も上がる。すべての子どもたちが来るということで、自信もついてくる。教育や、弱者を作らないことで、例えば、晩御飯も家族で食べられないという家庭もあります。そういった子どもたちのために、食事を提供したり、勉強を教えたりするということが、まちの厚みを増すためのしっかりとした戦略となると思っています。しっかり組み込んでやっていきたいと思っています。

それから、白崎さんのシーニックナイトの話。素晴らしいことだと思います。去年も、JCがハッピーハロウィンをやったり、新しい動きですが、子育てのプレイパークをやっていただく、自主的な団体のお母さん方も、森や雪の中で自由に遊ばせるということをやっていると思います。まさに、まちの魅力は、そうした市民の方々の活動で出来上がっているのだなということを改めて感じました。先日、新聞の記事で、あるまちの方が、「恵庭は楽しいことをやってそうだから来ました」というコメントがあって、「これは勝ったな」と思ったのですが、そういった魅力は役所では作れません。市民の方々の活動が、恵庭の魅力をつくっているなということをつくづく感じました。より、こうした市民活動をしやすいするためのことを考えなくてはいけないと感じております。

青野さんのお話、本当に貴重な話をいただきました。本当に、一般の市民の方々は、総合計画のこともですが、行政のことには、なかなか関心がないと思います。私は、それは仕方のないことでもあるとは思っていますが、ただ、自分や自分の家族のことなどで問題が起きると、途端に、非常に関心を高めていただきます。例えば、自分の子どもが、この保育所に定員がいっぱいで通うことができないとなった時に、「市の行政というのはどうなっているのだろう？」と関心を持っていただける。その時にその問題をどう解決していくかというこ

とが、我々行政に課せられた問題だと思いますし、そのお父さん、お母さんは、「ほかの家・地域はどうなっているのだろう」ということを調べ出しますし、恵庭の行政全体についても調べていただけるのではと思うのです。その中から、より高いレベルの行政、市民と一緒になった取組みというのが出てくるのではないかと感じながら、興味深く話を聞かせていただきました。

これは別の話ですが、楽しいことがあったので。

先日、買い物に妻と千歳のレラに行きました。セーターを買おうと思って、ある店で見えていたのですが、その店員さんが、私が市長だということは知らなかったのだと思うのですが、非常に親切な女性の方だったので、買って帰る時に、「どちらにお住まいですか？」と聞いたのです。そしたら、「恵庭です。」と言っていただいて、そのあとに、5年前に札幌から引っ越して来たらしいのですが、「恵庭って、本当に子育てにいいところですね」と言われたものですから、思わず、もう1着買ってしまいました。

小磯教授： ありがとうございます。

私もだんだん恵庭のまちの魅力に魅かれている1人ですが、今日のテーマ、総合計画、総合戦略の中で、私が、恵庭はすごいなと感じたことのひとつとして、最初に総合計画の策定作業の中で、あるデータを見たのです。私が、いろいろな地域で、国内外、地域の活性化、地域開発というのを見たときに、人口というのは、大事な指標ではあるのですが、それが最終的な目標値ではないと思うのです。

今、日本では、人口減少で騒いでいますが、途上国では、増えすぎる人口をどうするかという、そういう地域も、地球の中ではたくさんある訳で、その時に大事な指標というのは、その地域に住んでいる方々が、ずっと、この地域で住んでいたい、自分の子どもたちもここに住ませたいという、地域への愛着、言い換えると、ずっと住み続けたいという定住の意識、これの高い地域をつくり上げていくということが、私は大事な方向性としての指標なのではないかなと、かねてから思っていたのです。

そしたら、今回、総合計画の中で、恵庭市の定住意識の調査結果を見て、大変驚きまして、大変高い。これだけ、地域づくりが既になされている。

逆に言うと、こういう地域の地域政策というのは、今後ますます大変だなと思いました。さらにこの質を高めていくための取組みというのは、実は大変難しい政策ビジョンなのではないかと思いました。

それから、住む方の魅力なのですが、最近の恵庭を見ると、住むだけでなく、恵庭に行ってみたい、恵庭を訪れたいという動きが出てきているように感じます。人口減少という時代の流れの中では、人々の生活を支える仕事であり、産業など、経済面で需要を高めていくことが重要です。そのために

は、外からの需要を取り込んでくるということ、外から来る人の消費を恵庭という地域の、これからの経済・産業のサイクルの中に取り込んでいくということが大事であり、それがごく自然に出てきているというところが、恵庭はすごいなと感じています。

先程から、「すごい」「すごい」と申し上げていますが、ここで、最後に申し上げたいのは、この北海道の中で、こんなに恵まれたところはないのです。

私も、総合戦略のお手伝いを、北海道内でいくつかやりました。北海道庁の総合戦略のお手伝いもしております。その中で、かなりのところは、本当に深刻な人口減少であり、2040年、2060年には今の40～50%という人口推計のところもあります。

実は、恵庭は今、そんなに人口減少をしておらず、今後もそれほど人口減少するという地域ではないのですが、この恵庭の周り、北海道全体は確実に減っていく訳です。経済というのは、恵庭だけで成り立っているのでは全くありません。地域の経済とは非常に開放的なものです。我々が暮らしている北海道そのものが、この人口減少で、非常に厳しい経済状況に陥る可能性があります。その時に、この恵庭が、どういう地域の方向性を目指し、どういう戦略を練っていくか、ぜひ、そのような広い視野の中で、恵庭というものを考えていただきたいと思います。

では、次に、本日は、せっかくのパネルディスカッションですので、将来に向けて、皆さんが、総合計画、総合戦略の策定に関わってきた中で、ごく小さな提案でも構いませんので、それぞれのお立場で、どういう取組みが将来に向けて大事だと思われたか、お話しいただければと思います。

今回は、逆に、青野さんのほうから、ご発言をお願いいたします。

青野 様 : 今後は、私は社会教育委員をさせていただいておりますが、社会教育というのは、学校教育以外のすべての活動がその範疇となりますので、地域活動、PTA活動、小さなお母さん方のサークル活動もすべて、社会教育に含まれてくるというのを、社会教育委員をやって初めて知りました。

町内会の育成部長もやらせていただいておりますが、そこに住んでいるお子さんは、地域の方々と交流するというのが、最近めっきりなくて、少ないなと思っています。子どももだんだん数が減っていますので、参加するのも大人のほうが多いということもよくあります。

ただし、子どもの数は減っているのですが、参加率が低いというのは、子どもを取り巻く状況が、昔とちょっと変わってきていることが要因として挙げられると思います。子どもが忙しい、習い事、塾に行っている。なので、町内会の行事は参加できませんという状況にもなりつつあります。ですが、それに負けないように、こんな楽しいことをやっているということを発信していきたい。

そこに住んでいる限り、転勤とかがない限り、私たち親は年を取って、そこに定住するつもりでいるのですが、子どもの活動を通して、親同士が顔見知りになり、高齢者の方が一人で住んでいて、心配だという話をよく聞きますが、そういうことに負けない地域づくりを、本当に微力なのですが、今から、少しずつ始めていって、自分の町内、恵庭市に住んで本当によかったと言ってくれる方が1人でも2人でも増えてくれたらいいなと思いながら、これから活動していきたいなと思っております。

小磯教授　：　はい、ありがとうございました。

いやあ、すごいメッセージがどんどん出ますね。

他の地域で、人口減少時代で、こういう議論をすると、本当に悲しくなるような暗い議論が多いのですが、青野さんのお話を聞いていると驚きます。

ただ、お話の中でも、子どもたちが忙しすぎるとか、いろいろな状況の中に、これからの人口減少の時代に潜む怖さを感じ取っていくことも大事で、実は、総合戦略の議論の中でもそういった議論があったのですね。

せっかくなのでご紹介しておきたいのですが、恵庭の総合戦略の中で、これはなかなかすごいなという政策提案があります。

資料の後ろから2枚目（8～9ページ）。恵庭市の総合戦略の3つの大きなポイント。「結婚出産から定住まで切れ目のない支援事業」という項目があります。これはすごく大事なことで、これまでの行政の施策というのは、分野別であり、それをまとめた総合計画という構成でした。この支援事業というのは、1人の人間が生まれてから成人になるまでの時間軸の中で、市としての政策としてどのようなものができるのか、それを追いかけているのですね。抜けている施策を埋め込むことによって、その人の一生、出生から、成人になって、社会人として生活するまで、長い目で、市役所の政策として追いかけていこうではないかということです。

こういう視点の政策議論というのは、実はあまり、これまでの地域の政策議論の中であまりされてこなかった。これは、国からの地方創生における指示では全くありません。我々が、総合戦略の議論の中で、恵庭市の中から出てきた。こういう発想で、新しい視点で、政策を構築しているというのは、社会教育の話から、今、青野さんのご提案にあった、自分たちが住んでいる地域の中で、自分たちの子どもをどう育てて成長していくかという発想と、共通する部分があって、こういう議論は、今回の総合戦略の一つの成果なのではないかなと思います。

さて、お待たせいたしました、白崎さん、よろしくお願いいたします。

白崎　様　：　まちの5年先、10年先に、どうやら人口が減っていくらしいということは分かりましたが、どういうまちになっているかというのはやはりイメージしづらいです。それを、自分の人生を5年後、10年後、どうやって生きていきたいかと考えると、また、見え方や考え方が変わってくるのだらうなと思いました。

私も子どもがいて、受験もそう遠くはないので、「この先どうしたいの?」「どういう学校行きたいの?」という話はよくするのですが、もしかしたら、大人も、そういう進路相談のようなものをしてよいのかなと感じました。例えば、生命保険のプランを変えるときに、自分の子どもの卒業のタイミングや、ローンを払い終えるタイミングなど、合わせて考えますが、それを、自分が、5年後、10年後、何をしたいかということと重ね合わせて考えていくと、こういう支援が必要かもしれないとか、こういう妨げが出てくるかもしれないという時に、誰に相談したらよいか。同じようなことを考えている仲間が意外にいるなど気づいて、まちづくりがぐっと身近になってくるなと思います。

恵庭も、ガーデニングや図書館の読書に関する取組みなど、「育つ」という意味でイメージは浸透していると思いますが、大人も「育つ」という感覚で、5年後、10年後を考えていくと、総合計画が面白いものになっていくのではないかなと思います。

小磯教授 : はい、ありがとうございました。

こういう計画づくりに関わっている者からすると、今おっしゃったような白崎さんのお話というのは、すごく考えさせられます。

人生の生き様に照らして、行政の長期的な政策を近づけていくという視点というのは、私もいろいろと計画に関わってきていますが、改めて、ハッと感じさせられる、すばらしいご意見だと思います。

先程紹介した、「結婚出産から定住まで切れ目のない支援事業」、人の出生から、成長に沿って政策を改めて、見直して、そこで足りない施策を少し肉付けしていくということと、少し共通するところもあったかと思います。

さて、では次に、井上さん、よろしくお願いいたします。

井上 様 : 先程小磯先生からの紹介もあった、総合戦略の出産から定住までの支援事業というのが、私も思い入れのあるスキームでして、高校ですと、北海道立の高校でするので、恵庭市としてなかなか関わるということも少ないと思うのですが、青年期の研究をしている私の立場からすると、とても大事な時期だなと思っていて、こういう時期だからこそ、地域に関われる機会があるということが、「恵庭愛」とどこかに触れられていましたが、郷土愛につながっていったりすると思います。子どものときに地元が好きだということ、大人になってから地元を大事にするというのは、異なるんですね。

大人になっていくプロセスで、地元が好きになっていく、地域のために何かしたいと考えるのは、大人になってどういう人間になりたいかということに非常に大きな影響を与えることです。

今、私の学科では、学校教師や保育者を育成している立場ですが、この視点があるかないかで、どういう先生になっていくのかが大きく違います。ひいては、恵庭のような、まちづくりに積極的に取り組んでいる、あるいはそういう動きが

あるという地域に対して、学校の先生がどう関わっていけるかというところも変わってきますし、そういう視点で子どもたちが見られるかということが、教室以外の、家庭や地域で子どもたちが生き生きするところが見られる。そういったところが、今後の教師や保育者にとって、とても必要な視点かなと思っています。

そこで、自分たちに何ができるかという視点に戻りますと、今までだと、ボランティアという形で、学生が「参加させていただく」という形にどうしてもなっていました。できれば、そういう力をもっとつけさせて、あるいは、私たち研究者としてももっと関わる機会を持って、ひとつひとつの課題を、具体的に市民の皆様と解決していくような担い手になる、つまり、大学でも地元就職するような学生は多くないかもしれませんが、この恵庭の中で4年間専門を学んで、地域で自分も活躍をしたという経験が、恵庭出身の住民・子どもたちに愛される教師や保育者として、全国に散っていくということが、人口として数字には表れないかもしれないですが、恵庭の価値をまさしく高めていくことにつながるのではないかなと思います。新たな恵庭の誇り、北海道の誇りにつながっていくのではないかなと思います。

先程の土曜スクールのような、地域で活躍できる機会をつくっていけるような大学づくりですとか、あるいは、家庭の貧困問題も含めた、具体的な課題の解決に貢献できるような取り組みを皆さんと協力してどんどんしていくということを、ひとつひとつ具体的に追及していく。また、子どもは実学が主ですので、一人ひとり関心を持って現場に関わっている先生も多いのですが、大学としてもつなげていって、もっと恵庭のまちづくりに大きく貢献できるようにしていきたいなと思っています。

小磯教授 : はい、ありがとうございました。

でも、先生、どうでしょうか？

大学は地域社会に貢献していかななくてはならないという要請があって、それは、強制されてやるものではないですが、今の学生を見ていると、地方への関心とか、足元の地域社会への関心というのが、かなり高まってきているような印象を受けています。

ただ、なかなかそういう場・機会というものがない中で、井上先生がやっておられる活動とか、今後やっていきたいことということがありましたら、少し、お話しいただけますか？

井上 様 : 今、私どものこども発達学科では、学生のうち、半分以上がこのまちのボランティアに関わらせていただいています。

学校に行くと、アシスタントティーチャーという形で、先生方の授業の中でお手伝いをさせていただいたりですとか、黄金ふれあいセンターの子育てサロンなどに、学生が独自にサークルを作って、関わらせていただいたりしています。

学校教師を目指す学生たちには、地域の学校の先生に来ていただいて、授業づくりのサークルというのをやっています、それと、アシスタントティーチャー

	という取組みがつながっていったりしています。そういう意味では、私たちが絡む前に、学生のやる気と、地域の皆さんの手助けによって成り立っている部分があります。それを、もっともっと比率を高めていきたい。 小さなまちから、学生たちもたくさんやって来ます。ですが、恵庭のこの地域につながるような、ボランティアも経験して初めて、「じゃあ、私たちのまちはどうなのだろう？」「公民館ってあったっけ？」などと、自分たちの地域のことをやっと思返す機会になったりしていますので、今は、地域の方々に育てられているのですが、そのようなつながりをもっと深めていきたいと思っています。
小磯教授	： はい、ありがとうございました。 そこが、恵庭らしさという、これだけ多くの学生さんが集まっておられるということが、地域の魅力につながっていくのではないかと思います。 それでは、切明さん、よろしくお願いいたします。
切明 様	： 私たちに何ができるかということで、井上先生と重なる部分もあるのですが、恵庭市人口ビジョンで、確実に人口減少するという未来予想図が成り立つ中で、高等教育機関の必要性や存在意義などを感じています。2060 年までのビジョンの中で、そこまで学校を継続させていくことが、学校としての最大のテーマとなります。 では、その中で、2060 年までに学生をどう育成していくかということを考えれば、教育＝人をつくり上げていくということだと思っていますので、地域課題に真正面から向き合える人材育成というのがひとつ大きなテーマにはなってくるとしています。 今までは、学校、学科に入って、学科の中の専門知識を身につけて卒業していくという学生を育成してきたと思うのですが、今後は、そうではなくて、地域課題に真正面から向き合う学生を育てるキャリア教育を築き上げていくような学校運営をしていきたいと思っています。 そういう意味で、恵庭の抱える課題に、私どもの学校が、どういうことができるのかについて、今ある学科構成の中では、まずは、恵庭の、まだ、価値の見出していないようなものがあって、商品の企画が、若者だったらさらに新しい視点でできるのではないかとということであったり、また、地域医療に向けて、よりサービスをできる若者が育成できたりするのではないかと思います。恵庭は、子育て支援にかなり力を入れていますので、恵庭市と協働で、他の地域にない子育て支援のできる人材育成を行ったりできるのではないかと。 また、今年にはリオデジャネイロオリンピックがあります。市民の応援をいただきながら、北海道ハイテクACのメンバーが代表入りを目指し、さらには、今、スキージャンプで活躍してきている学生も平昌オリンピックを目指しています。スポーツを通じて、活気のあるまちづくりに貢献できるのではないかと考えています。

	若い世代が、地域課題に真正面から向き合えるようになれば、特定の専門知識や技術だけではなく、何かと何かをつないでいくという力がこれからは非常に重要になると思っていますので、組合せによって、「1+1=2」ではなく「1+1=3」にしたり、何もない状態から「1」を生み出したり、そういう力のある、地域課題に向き合う学生を育成していければ、今後、何十年間、人口減少に向き合いながら、続いていくような形ができるのではないかと考えています。 学校としては、そういう学生を育成するプログラムを作り上げ、そういうことに興味のある学生が集まっていくことで、継続した学校運営と、恵庭に若者が来る環境づくりができるのではないかと思います。
小磯教授	： はい、ありがとうございました。 若い方々が、地域に関わるというのは、かなり多様だと思うのです。 私も以前、釧路で大学運営に関わっていたこともあるのですが、釧路の人口は17万人程度であった中に、私のいた釧路公立大学というのは、4年制で約1,300人程度の学生がいました。18歳から20歳前半の若者が、常に、地方都市に集まっているというのは、地方にとっては、最高の若者を受け入れる装置となります。 こちら、地元就職する人はほとんどいません。だから、こんな大学を作ってもダメだという声は一切ありません。常に若者が地域にいるというのは、すばらしい財産です。 恵庭の場合は、本当に羨ましいくらいです。恵庭のまちで、多感な青春時代を過ごした若者が全国にいるというのは、すごい財産です。総合戦略の議論の中でも、若者に関わって、どういう支援・施策をしていくのか、どういう方向性で行くのかというのは、大変大きな議論のひとつでした。 そういう意味で、切明さんのおっしゃられた取組みというのは、地域にとって本当に大事になってくるのではないかなと思います。 さて、原田市長、どうでしょうか。感想でもいただければと思います。
原田市長	： 皆さん、恵庭のまちづくりのために、いろいろ考えていただいて、また、実際にボランティアなどで子どもたちの経験に携わっていただいて、本当にありがたいと思っています。 高等教育機関の関係からお話いたしますと、できれば、卒業された方々が、地元で勤めていただきたいということもありますが、もちろん、若者は様々なところで、様々な経験をしたいということがありますから、いろいろな考えがあるのだろうとは思いますが、ただ、3～4年間、恵庭で生活する、通学するということですが、恵庭の発信になっているのかなと思っています。そういう意味では、高等教育機関があるというのは、本当にありがたいことだなと思っています。 ただ、もうひとつ、踏み込んでいけば、キャリア教育の中でインターンシップというものがあると思うのですが、そういったことを、もう少し長期間、2～3か月と、恵庭にある企業に勤めていただいて、例えば単位につながっていったりす

ると、おそらく、企業にとっては優秀な社員の選別等もできてくる可能性があるのではとったりします。仮に、その時は有償で、ということも出てくるかもしれませんが、そういう新しい動きが、ちょっとではあるが出てきているとも聞いていますので、そういった動きが広がればなと思います。

また、恵庭市では始まったばかりで、かつ大変難しい話ですが、障がいを持った方々が農業を経験するという農福連携を探っている段階であります。そういう場に、学生の方々が、一緒に仕事をするという経験をするといったことも、今後の自分のキャリアを活かすために大切になってくるのではないかなと思っています。

今、恵庭もちろん、北海道全体で、非常に人手・人材不足です。有効求人倍率も、恵庭は0.8倍程度ですが、北海道では1.0倍を超えて、ミスマッチングが起きています。場所・職種によっては、非常に人が足りないということも起きています。一方では、大学等の高等教育機関に通うために、まちの外はもとより、道外に出ていかねばならない。例えば、技術系の大学などは、どんどん道外に行ってしまうということもあって、それを、何とか、北海道で勤めてもらう方法はないのだろうかということを感じています。例えば、工業系の国立大学は、北海道に、どのようなものづくりの会社があるかということ自体知らないという事態もあって、工業系・技術系の学生は、みんな道外に行ってしまうということになっていないだろうかと思っています。そのため、恵庭にもすばらしい企業があり、働き場があるのだということを、ぜひ、繋ぐ工夫をしながら発信していかなければならないと感じました。

また、白崎さんのお話、大変興味深かったです。女性でいえば、それぞれ、結婚・出産をして、子どもが小さいときを経て、子どもから手が離れるといった時に、新しく何かを学びたいとか、仕事に就きたいとか、そういった自分のライフスタイルに合わせるという時に、何ができるか。自分のライフスタイルとそのまちのまちづくりの関係ということだと思いますが、それをどのようにして、もちろん自分で探し出すということもあると思いますが、その情報をどう提供するかということが大切になってくると思います。

そういった意味では、市民活動センターは非常に楽しい人がたくさんおりますし、情報も集まっていますから、そのような場を利用する中で、仲間と新しい市民活動をしてみたいということも起きてくるのではないかと期待しています。

青野さんのおっしゃった、社会教育での地域の活動は、本当に大変だと思います。ありがとうございます。川沿町内会で作った手打ちそばを食べさせていただき、ありがとうございます。手打ちそばも、住民の方々が、敬老会に手作りして、高齢者の方々に提供されています。そういった活動も大変すばらしい事だと思います。

先程の小磯先生のお話に戻りますが、北海道全体が人口減少になるのは間違いない。たとえ、恵庭が維持しても、周辺がそうなるのだということを考えれば、

恵庭の地域経済をどうするのかという話に関わってくるという話を伺って、本当に深刻だなと感じました。

もちろん、人口が減ってくれば、社会資本整備も減ってきますし、いろいろなところで影響が出てくると思います。その中で、みんなが仕事を持ち、収入を得て、暮らしていくためには、どうしたらよいかということを考えたいと思います。

ひとつのヒントとしては、卒を増やすとなると、海外、インバウンドだったり、観光面での交流人口を増やすということだったり、ひとつのビジネスチャンスになると思っています。また、私は、企業誘致等も必要と思っています。引き続き、そういったこともしていかなければならないですが、ただ、恵庭の行政だけがやったところで、たかが知れているので、企業や市民の力でこのまちが楽しくなっていくのだろうなと思っています。

小磯教授： はい、ありがとうございました。

あつという間に、議論の時間が過ぎてきましたが、私も最後に感想を申し上げます。

最初にひとつ、これだけは申しあげておきたいのは、人口減少の問題というのは、日本全体の問題です。日本全体の中で、この北海道、恵庭の立場をどう捉えていくかということを考えたときに、大きな問題が1つあります。

日本創生会議が問題提起した背景には、多くの若者が、大都市圏、東京に集中していくという構造の中から、日本の人口減少の構造的な問題が提起されています。

象徴的なのは、日本の大学生の25%＝4人に1人が、今、東京都で大学生をして生活をしています。東京都の人口比というのは、全国のちょうど10%です。10%の人口比のところに、日本の大学生の25%が住んでいる。高等教育と首都機能は何の関係もありません。海外に行くとうどうでしょうか？高等教育は、本当にゆとりのある地方都市の、ゆとりのある環境で、学生生活を過ごすという形です。ところが、今、日本では、効率的に高等教育をという、安上がりの高等教育という政策が、結果的に、人口減少の大きな構造的な問題に結びつく政策につながっています。

皆さんは、恵庭市民であると同時に、北海道民であると同時に、日本国民です。そういった意識で、人口減少問題の背景にある課題というのをしっかりと考えていく意識が大事ではないかと思います。

戦前の日本はどうだったのでしょうか？ナンバースクールというのがありましたね。一高は東京でしたが、金沢、仙台、熊本、見事にバランスの取れたゆとりのある高等教育施策が展開された、伝統のある我が国が、いつの間にか、市場原理の中に高等教育が位置付けられた。実は、そういう問題意識も、この機会にしっかりと考えることで、人口減少に向き合う、国民的議論として提起していく必要があるのではないのでしょうか。それと、本日、多くの議論があった若者。高等

教育に集う恵庭の若者に向き合う議論というのが、つながったものとして理解していくのが大事なのではないかと思います。

もうひとつ、人口減少について、いろいろな地域で議論している中で、感じるのは、「地方消滅」「限界集落」など、先行きの人口がどんどん減っていくということを考えたときに、一番怖いのは、将来への不安があると、個人の消費が貯蓄に回ったり、企業活動ならば設備投資をやめてということになり、将来への不安から消費・投資を抑えることによる経済活動の縮小、そこから引き起こされる、負のスパイラル。将来への不安から引き起こされる萎縮の気持ち。これは、実は、地域にとっても、国にとっても、一番怖いことだと思います。

ですから、本日の「人口減少に負けない」という言葉の持つ意味は大変大きく、将来に対する夢、人口減少下でどういう人生の目標を立てればよいのかということが、本日のテーマである、総合計画、総合戦略において、一番大きな意味なのです。

人口が増えている時代は、目標を持たなくとも、自然に放っておけば、どんどん前に進んでいきました。ところが、人口減少下ではそうはいかない。一定の、みんなで一緒に取り組むべき、共通の目標・指針というのをしっかり持つことによって地域が強くなっていく。そこで、地方自治体の役割というのは、羅針盤です。方向性をしっかり示していくことであり、それが、本日のテーマである総合計画、総合戦略です。そういう意識で、会場の皆さんも、総合計画、総合戦略の意味というのを、しっかり自覚的に持つことが大事なのではないかと思います。

そして最後に、それを支えていく、地域としての取り組み、状況というのは、みんなで一緒に取り組んでいくという雰囲気・状況づくりです。それは、市役所、市長、国が言ったところで、なかなか、動くものでは全くありません。自然に醸成されてくるものです。

そういう中で、本日のパネルディスカッションの中に多くのヒントがありました。白崎さんからご紹介があったシーニックナイトの話。自発的にあのような取り組みがどんどん進んでいるというのを聞いて、非常に感激しました。それも行政の指導ではなくて、ごく自然な流れでそうなったということです。そして、青野さんの前向きなご活動も感激いたしました。

このような、自発的な地域の活動の状況づくりというものが、なぜ、どういう形で生まれているのかということを、いまひとつ、恵庭の皆さんに考えていただくことで、本当に質の高い地域になっていくのではないかなと思います。

また、市長が最後におっしゃっていましたが、確かに、人口減少は、経済的には大変です。そういう中で、どう生き抜いていくかと考えたときに、観光戦略も含め、地域外から需要の取込みも大事ですが、それは、なかなか、意識して、小手先でできるようなものではありません。魅力のある地域に、質的に高まってい

く中で、もたらされてくるものだと思います。それも、ある意味では、ひとつの戦略なのではないでしょうか。そういう気持ちをしっかり意識することで、取り組みが実を結んでいく。そういう意味での恵庭の可能性を感じる本日のシンポジウムだったのではないかなと思います。

さて、あっという間に与えられた時間が過ぎてしまいました。楽しいパネルディスカッションでした。

当初、私の役割として、モデレーターということで、この地域のこれから取り組みをさらに深堀していくための方策が、1つでも2つでも引き出せたかどうか。そこは、改めて、皆さん方に、皆さんの立場で考えていただければと思います。

これで、パネルディスカッションを終わりたいと思います。では、司会の方にお返しいたします。

■ 4 まとめ・閉会

司会 : 小磯教授、また、パネリストの皆様、活発なご議論をいただき、誠にありがとうございました。

今後の恵庭を、より良く、「恵庭はやっぱ住みやすいね」「恵庭に住んでみたいな」と思われるようなまちにしていくには、会場の皆様と、一緒にまちづくりを進めていくことが重要です。今回のような議論が、行政・市民の間で活発に続けられていくことが、恵庭を良いまちにする取り組みにつながっていくのではないのでしょうか。

では、閉会の挨拶として、原田市長より、改めて、お願いいたします。

原田市長 : 夜遅くまで、本当に熱心にご議論いただきまして、本当にありがとうございました。これからも、皆様と一緒にまちづくりを進めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

本日は、ありがとうございます。

司会 : ありがとうございました。

小磯教授、パネリストの皆様、会場の皆様、本日は、長時間にわたり、ありがとうございました。最後に、改めて、小磯教授、パネリストの皆様に盛大な拍手をお願いいたします。

それでは、以上を持ちまして、シンポジウムを終了とさせていただきます。

どうぞ皆様、お忘れ物のございませぬよう、ご支度の上、お気を付けてお帰り下さいませ。

本日は、誠にありがとうございました。